



2011年5月15日

いま起きつつあること...



ボランティアチームに参加して

私は東京基督教大学で募っていたボランティアチームに参加し、国際飢餓対策機構を通じて宮城県に行き、実際に津波で被害を受けた町にはじめて足を踏み入れました。その光景は私にとってとても衝撃で、今までに見たどんなものより絶望感を感じさせるようなものでした。

今回のボランティアでは様々なことを考えさせられ、すべてを言い尽くせないほどののですが、その中でも私の心に強く感じさせられたことを書かせていただきましたと思

います。
何もしてあげることができない

初日に津波によって甚大な被害を受けた気仙沼市に行きました。そこで私が行なったのは、がれきの撤去作業や支援助物の整理でした。がれきの撤去作業では自分の力の小ささを痛感しました。一つのがれきでも重いですし、釘が出たりして危ないですし、何から手を付けていいのかわからないような状況でした。

がれきを撤去した場所は、おおそ小学校の教室一室分の広さで、決して広くはないその場所にあつたがれきを撤去するのに、20人がかりで約5時間もかかってしまうほど、作業は困難でした。

また定林寺というお寺の避難所にも行きました。そこには、約20人〜30人ほどの避難所生活をされている方々がいました。そして、その場所

生活されている何人かの人と共に、その人たちが住んでいた家に行きました。その家は誰が見ても、もう住むことができない家で1階部分は家の骨組みだけを残し、壁や窓はすべて壊れていました。

そんな中で、ある中学生くらいの女の子は、「あのね、私の家は全部流されちゃったんだよ!」と、わざとなのか、少し明るく私に向かって言うのでした。私はその町の悲惨さを目の当たりにしながら、苦しみを共有できない自分が嫌になりました。またその人たちのために何をしてあげることができるとか分からないでいる自分に憤りを覚えま

した。正直、私はその場所でも何もしてあげることができなかったのだと思います。その時その時の避難されている人の要望に応えることはできたのかもしれませんが。しかし、それは焼け石に水のようにしか思

えないのです。
キリスト者にできる最低限のこと

実際にできたことというのはであれば、避難所生活されていた方々とお話をさせていたことだけでした。また、これからその人たちのためにできることと言えば、手紙を書くこと、実際にもう一度会いに行くこと、くらいです。しかしそれが私にできる一杯のことだと思います。

しかし、それがその人たちの心の支えになると信じたいと思います。特に今回の災害で傷ついた人たちのことを忘れないこと、これがキリスト者が今できる、最低限のことだと思います。たとえ「焼け石に水」と思えるような小さな行動であっても、それらを通して神様が今、痛み苦しみのただ中にある方々に働かれることを願います。

(中会神学生・伊能悠貴)